

奨励研究 研究報告書

研究課題

近世津地方の茶の湯 — 川喜田家の場合 —

同志社大学大学院文化情報学研究科 博士課程後期課程

宮武 慶之

## 一 研究の概要

川喜田久太夫家（以下、川喜田家と省略）は、近世中期にはじまり現在で十九代を数える、津地方を代表する商家である。家の生業として、かつては日本橋に本店を置く木綿問屋であった。現在、津市に本店を置く百五銀行（創業明治十一年）の創業家でもある。川喜田家は歴代の当主が芸能に親しみ、特に茶の湯関係の器物・書籍や文書が多数現存しており、現在、石水博物館に保管されている。また、後述するように久田家や堀内家をはじめ表千家との交流があり、特に両家とは密接な関係にあった。本研究では川喜田家に伝来してきた文書を中心に、三徳庵の茶道学術助成（奨励研究）をいただき、川喜田家のご理解と、石水博物館のご協力のもと、近世津地方での川喜田家における茶の湯と、その茶の湯文化史上の位置付け・評価を行うことを目的とするものである。以下、文書研究とその成果について報告を行う。

## 二 川喜田家と文書について

### (一) 川喜田家について

当代で十九代を数える川喜田家は、歴代は表千家堀内家の茶を学ぶ家であった。堀内家との交渉は十三代政安（梅屋1796年—1851年）の時代から十四代政明（埴斎1822年—1879年）の時多く見られ、堀内家には宗完、宗幽親子があり特に宗幽（至慎斎1827年—1896年）との交渉が多い点が指摘できる。また近年、その評価の高まりをみせる半泥子は久田無適斎（1884年—1946年）に師事し茶の湯を学んだ。近世の川喜田家は表千家の茶をよくした家柄であるといえる。

近世津地方の茶の湯を巡る状況は、津藩祖の藤堂高虎正室が小堀遠州の妹であった点が先ずあるが、遠州流の影響は川喜田家や津地方にはみられなかった。ただ津藩御用商人であった呉服商十二屋の藤村庸軒の影響はあったとみえ、高弟の近藤柳花の書状なども残されている。なお現在、庸軒の流れを受け継ぐ宗旦古流（現家元は高田本山専修寺住職が務めている）があり、その普及に努めている。

当時の伊勢地方には表千家十一代家元千碌々斎（1837年—1910年）の高弟であった金森得水（1786年—1865年）があり、当地津における稽古指導にもあたったと思われる。川喜田家との関係を示す資料は碌々斎が相伝を許す免状（茶通箱）が挙げられ、川喜田久太夫の相伝を得水に伝える文面となっている。ここにある久太夫とは十四代政明（埴斎）のことで、津に居を構える当主もあつた。書状の宛名には「神都 川喜田久太夫」や「伊州 川喜田久太夫」と書かれ、京都には出張所のような店があり、基本的には三重県津地方に住した。

### (二) 文献研究成果

石水博物館に所蔵される文書を中心に調査した。なお川喜田家の文書は『川喜田家歴史資料目録』<sup>1)</sup>に既に紹介されるが、その内容についての研究は今回のものも含め更に研究の余地があると思われる。

#### ・茶会記

石水博物館に所蔵される関係資料中、茶会記については茶の湯を含めた芸能をよくした梅屋（十三代政安）と埴斎（十四代政明）および半泥子（十六代政令1878年—1963年）を中心に資料を挙げると、①『諸色日記』、②『茶会日記』、③『茶道具使用帳』、④その他が挙げられる。

### ①梅屋の茶会『諸色日記』

表紙から嘉永二年酉正月以降の、他会記の性格を持つ。当時の詳細な茶の湯の様子が伺える。本会記で貴重な点は、記載される内容に三重県内（当時）の茶の湯を通じた交流が確認できる点である。四日市の山中伝郎、田丸（伊勢）の太田角、上田町の松三南上林味卜、小林清右衛門、川邊元郎、逢林五郎などの名前が見られるが、今日当地で商家として確認できるものはなかった。



茶通箱相伝の免状

茶会記から察するに、その使用される道具から床の間の掛物としては藤村庸軒の詩、小堀遠州、鳥丸光廣などがみられる。席中に使用される器物の作者には千家十職をはじめ千家家元の書付のあるものや、その作になるものが用いられている。当時、これらの茶を通じた交流が三重県内で行われていた点は千家茶道の茶の広がりを見る点で興味深い。

## ② 埴齋の茶会『茶会日記』

表紙には「明治土寅夏より」と書かれており、明治十一年夏からの記載であり、十四代久太夫・埴齋の茶会記であると考えられる。生没年から、晩年の会記であることがわかる。その内容は他会記を中心に書かれているが、埴齋本人が書いたものとは考えにくい。それは、客組で特に川喜田久太夫は川喜田埴齋と書かれ登場する。この中では、内本横雨、上田折言、池永眉翁（新之助）、竹田氏、谷むら伊右衛門、鹿嶋氏、若江氏、中村果翁、山和氏、鹿嶋氏、井上氏、廣屋佐之助、梅置佐之助、生手氏、立むら不晴（雪之助）、山西宗五郎の名前が確認できる。

主にこれらのメンバーで茶事を行い、客として招かれるなど、そのコミュニティを確認できる。使用される道具も千家の道具が中心で、小間の茶の湯が多い点が指摘できる。本会記中、川喜田氏の名前のない席は当日、席主であった場合も考えられることを申し添える。

## ③ 半泥子の茶会『茶道具使用帳』（末に翻刻を付す）

これは明治四十二年中の一ヶ年における茶会記録である。当時の川喜田家当主であった久太夫・半泥子（当時三十歳）の茶の湯道具の使用帳であると考えられる。

半泥子の茶会記録は詳しく残っており、その点で本資料は注目できる。本書はいわゆる自会記の性格を持っており、五回の茶会記が収められている。当時居住した津における茶会の記録書である。なお石水博物館に所蔵される作品からいくつか記載される品名と確認ができる。

回数こそ少ない会記ではあるが、使用される道具では、藤村庸軒、専修寺圓祥大僧正（高田本山住職）など地域に関係した人物の器物が見いだせる。また、表千家流の茶道具が多い点が指摘できる。この頃は利休作の竹花入「音曲」（同館所蔵）の使用が「祖母上追善茶湯」から確認できた。半泥子は、若くして川喜田家当主となったため、その養育には祖母の政子があたった。関係するものとして半泥子に残した「政子遺訓」（石水博物館所蔵）や、祖母政の慰霊を弔うために立てた紅梅堂（千歳山々内）がある。

道具組からは千家宗匠の器物と朝鮮、高麗系の茶碗、樂茶碗では一入などがみられ千家の茶が垣間見える。後年作陶に取り組んだ半泥子の背景を伺う資料として興味深い。なお、会記中で「樂」、「並」、「新口」とともに番号が付与され、その記載が見えるのは川喜田家における所蔵の蔵番である。

## ④ その他

茶会記では京都の三千家を中心とした茶会記や一部に鴻池家、庸軒追善の茶会記が確認できる。恐らく梅屋時代に入手したものと考えられるが、梅屋本人が出席・同席した確認を行うことが出来なかった。

梅屋が入手した会記の中には、天保十一年（1840年）に裏千家で催された「就利休居士二百五十年忌追悼口切茶事」などに「梅屋」の押印が確認できる。

後にも述べるが、堀内宗幽や金森得水をはじめ、茶友と思われる人物からの消息などから、会記情報が寄せられたと考えられるものもある。

また、入手した時期の当主は分からないが、『茶会記』とある和本綴の一冊には、その一頁目に「文化十四年」とある。本書は1817年の記載で、当時の川喜田家当主で該当人物はおらず、その会記とは考えにくい。他に『新古茶湯紀』などもある。こうした会記情報は、流派や各人における茶会の雰囲気や伝えると共に、茶風が伝播した部分ともみることができ興味深い。

## ・書状

既に述べた通り、石水博物館には堀内宗幽との交流を示す書状も多く残され、いわゆる千家の茶の広がり的一端を覗かせる。その書状や、保管される茶会の筆跡から考えると堀内宗幽、金森得水のものとも考えられ、千家における茶事などの会記を送るなどしていたと思われる。

特に、石水博物館に所蔵される「音曲」(伝千利休作)に付属する巻子の添状<sup>2</sup>では三千家家元(碌々齋、玄々齋、一指齋)のものと、堀内宗完宗幽連名書状が含まれる。

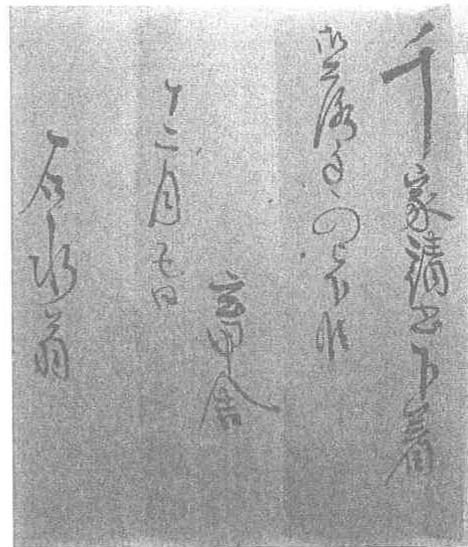
この巻子とは別に、堀内宗完、宗幽親子の書状も保管される。この時期の宗幽は極めや鑑定を依頼された場合、本状では義父・宗完(如是齋1807年—1840年)に相談する場合があったが、管見の資料では家元の碌々齋に相談する場合<sup>3</sup>もあった。

巻子中、三千家だけでなく藪内竹翁(1774年—1846年)の極状があるなど、その範囲には広がりがあった点が指摘でき、流派を問わない交流が伺われる。

梅屋は堀内宗幽からは茶会を通じた会記を得るなどしたが、当地津における稽古指導には金森得水があたりつたと思われる。先に紹介した相伝書に同包される添状があり、差出人の名が玄甲舎とされ、これは得水の別号である。

特に、川喜田家所蔵の茶会記中、吸江齋を亭主や正客にした会記が幾つか見出すことができる。この時代、得水が吸江齋に師事した関係もありその会記を入手し川喜田家に伝えたものと解せられる。

#### 金森得水状(相伝書内)



### 三 結び

今回の調査から、近世の川喜田家と京都を中心とした茶家との交流は、特に表千家の場合、堀内家、金森得水などを通じたものが大きかった事がわかった。また川喜田家は千家十職との交渉もあり、書状が多数残されている。これらは器物の注文や購入を通じたものである。

これらの多くの交流を通じてもたらされる多くの茶の湯に関係する情報に培われた茶の湯形態は、川喜田家を中心として、津地方における茶の湯に少なからず影響したと思われる。特に、半泥子時代には久田無適齋(1884年—1946年)も千歳山(津市)に来ており、半泥子が作陶した茶碗などに書付を多く行なっている。また、無適齋とともに、表千家千即中齋(1901年—1979年)も訪れる機会があり、その折、半泥子の点前による供応があった。

元来、三重県は藤堂家をはじめ、藤村庸軒、三宅亡洋、川上不白など茶人と関係が深く、また伊賀焼や信楽焼など桃山期以降茶の湯で大きく受容される器物の生産地でもあった。

三井家発祥の地である松坂では、松坂商人を中心とした数寄者も存在し、表千家碌々齋も松坂に赴いたことがあり、その時の松坂茶人らと交流の中で画賛なども書かれた。特に碌々齋は、本居宣長とも親交があり、重層的に津・松坂との交流を促したものと思われる。このような環境下で津地方における川喜田家の茶の湯文化は発展していったといえる。

今回の調査にご協力頂きました川喜田家、龍泉寺氏には厚く御礼申し上げます。

#### 〈資料紹介〉

半泥子の自会記である『茶道具使用帳』の表紙には「茶道具使用帳」と書かれ、裏には「大黒庵」と書かれている。ただし、現在大黒庵と名のある建物は見当たらない。以下に翻刻し紹介する。

「明治四十三年十一月十九日 観音寺山荘にて  
使用

茶碗 雲鶴 箱二八御本狂言袴とあり

紅葉御本 新高麗

水指 瀬戸末廣  
建水 高取

ふた置 祥瑞写 李之清作  
茶入 千碌々斎好

かがの家づと

軸 元政上人 山吹月 短冊  
花生 宗左作 鳩峯

釜 浄雪 鶴首 八十之賀  
風呂 難波今仲国清在名来焼

鬼面耳付

炭取 八犬糸取籠  
茶杓 庸軒作共筒

銘かがし

香合 黄瀬戸  
菓子器 一閑作四方盆

祖母上追善茶湯之節使用品

釜 名越与二郎作  
小阿弥陀堂

水指 古瀬戸  
濃茶入 古備前

棗 宗哲作 秋の野  
茶碗 七種 楽

本阿弥空中 銘残月  
茶杓 利久作

花生 音曲 利久作  
蓋置 時中焼糸卷形

炭取 八犬 糸取かご  
灰焙烙

風呂 十五号  
二十三号の内

五徳 五号  
火箸 二号

環 二号  
火入 十一合

煙草盆 一号  
香煙 七号

建水 瀬戸八ツ橋手

明治四十三年十二月一日より使用之  
釜 一号

富士千本末 浄雪前作

新口一号

水指 古備前

茶入 一号 濃茶入

永楽善五郎 了全

一号

茶碗 十一代 楽吉左衛門 赤

長寿楽舞図

光清下画

ウス一号

企 城刃八幡焼 画高麗写

茶杓 一号 専修寺圓祥大僧正作

名 月瀬

一号

蓋置 庸軒添書在判

二号

建水 八ツ橋手 瀬戸

十二月三日晴

釜 二号 奥平了保

雲龍釜 六十一自作

一号

水さし 染付

楽二号 宝来ノ字宗佐

茶ワシ 楽一入黒

並二号

企 トトヤ 古け免

茶杓 宗守自作

銘 杖

一号 袋 山葉蔓鈍子

棗 千元伯宗旦

二号 一つおく

蓋置 楽左入

二号 ニツ入

建水 砂張

十二月九日晴土風

一の三番 吸江斎好羽子板

釜 大西浄寿

並二番

水さし 瀬戸金花山

並三

茶碗 尾戸焼

古萩うつし

古二

棗 記三作共箱 紹鷗

新三 吸江斎宗左

一 茶杓 寒菊

古三

一 蓋おき 佐入作

並三

一 茶わん 一入黒

(翻刻は原本の表記に従った)

〈参考文献〉

- 「随筆 泥仏堂日録」川喜田半泥子著 講談社文芸文庫 2007年  
「川喜田半泥子 無茶の芸」早歌一郎・龍泉寺由佳 共著 一玄社 2007年  
「石水博物館名品図録」川喜田家歴代コレクション編「平成23年4月20日発刊  
「石水博物館名品図録」川喜田半泥子編「成23年4月20日発刊

1 『川喜田家歴史資料目録』茂木陽一 津市教育委員会編纂 1998年

2 千利休作 竹花入添状（卷子） 石水博物館所蔵

「利休音曲花入同文添

狂歌入花筒ノ竹ハ古織作

右被一覽乃処無紛之御秘

蔵可有之乃不宣

不審菴

五月仲旬

碌々（花押）

川喜田久太夫様

（以下略）

とあり、今日庵千玄々斎、官休庵千一指斎、燕庵藪内休々斎、長生庵堀内如是斎および至慎斎連名、古筆了件、以上六通が一巻の卷子に仕立てられている。

3 これは一入作黒茶碗、歌銘「夕紅葉」（個人蔵）にある添状の中で述べられる。堀内宗幽極状の内容は「了々斎の書附のある一入作の黒茶碗は、書附、一入作とも相違ないもの」としており、「碌々斎とも相談」した旨が記されている。

▷ 半泥子筆 音曲図 久田宗也、小西平内賛 石水博物館所蔵

平成二十二年茶道文化学術助成研究として提出された研究報告書の四件をここに纏めて編集いたしました。  
なお、今回の研究報告書に添付された資料・図表等は、すべて掲載致しております。

公益財団法人三徳庵 事務局

〒二六〇・〇〇一七 東京都新宿区左門町二十  
番 〇三(五三七九)〇七五三(代)

発行：平成二十四年六月八日